

幕末明治の写真師列伝 第二十二回 下岡蓮杖 その二十一

函館戦争のパノラマ画については、函館が陥落する明治2年(1869)5月11日の戦闘の様子を描いたもので、画の中央には函館湾が広がっており、その向こうに函館山があり、画の左手には激しく炎上する建物がある。函館戦争最後の激戦の様子を蓮杖は横山松三郎が撮影した写真を元に油絵で写実的に、またドラマチックに描いたのである。この作品は後に修復されて、現在でも靖国神社境内の遊就館で展示されているためぜひご覧いただきたい。

もう一枚の台湾戦争のパノラマ画については、明治7年(1874)5月22日の石門での戦闘の様子を描いたもので、『東京日日新聞』の従軍記者・岸田吟香から戦地の様子を聞き、松崎晋二が撮影した写真を元に、こちらも油絵で写実的に、またドラマチックに描いている。この石門での戦いは落合芳幾により新聞錦絵『東京日日新聞大錦』第712号「石門の戦闘を伝える三枚続」(明治7年)にもなった戦いで、蓮杖は一般にも評判だったこの戦いの様子をパノラマ画としたのはよくわかる。但し、この台湾戦争のパノラマ画は痛みもひどく修復されていないため、現在も靖国神社境内の遊就館の収蔵庫で眠っている。(蓮杖のパノラマ画については、木下直之『美術という見世物 油絵茶屋の時代』(平凡社、1993年)に詳しく述べられているので、そちらをご覧ください)

さて、この頃の蓮杖の逸話としては、次のような話がある。「みつは横浜市石川町蓮光寺に葬ったが、まことに貞淑謙遜な妻であった。短い世を駆け足なして、今日は早や、その黒髪もつぶらな瞳も吹く風の末に流れて、何一つ後に留め置くべき物もない。そんなせめてもの心移しながら、新居の軒下の空地に、二株の葡萄の苗を植えて置き、その蔓を屋根に這わせることとした。蓮杖の生地下田附近では、屋敷の中に葡萄を植えることを不吉として忌むのであるが、そのことを知りながら、わざと葡萄を植えるのは、一つにはその実を楽しむため、二つにはつまらぬ迷信に打ち勝つため、また三つには、亡き妻への手向草でもあった。」(前田福太郎『日本写真師始祖下岡蓮杖』(新伊豆社、昭和41年)より)

蓮杖が横浜から浅草に移ってくると、早速、礼を厚くしてその教えを求めて来た者がいる。その一人が明治7年(1874)に浅草吾妻橋の北角地に住んで写真館を開業していた中島精一(後の中島待乳)である。中島精一は下総銚子(千葉県銚子)に生まれ、文久年間に、銚子に漂着した外国人が持っていた写真機を見て大変驚いたことが、生涯写真志すきっかけになったという。元治元年(1864)に江戸に出て絵画を学び、漢書・蘭書をもとに写真術を研究していた人である。後には蓮杖の弟子・横山松三郎から写真を学びその弟子となって、中島待乳と称した。この「待乳」は、浅草の名勝「待乳山」に因んで師匠の横山松三郎がつけたといわれている。また、横山松三郎から洋画も学んでいた。蓮杖はこの中島精一を喜んで受け入れて、自分が横浜で使っていた写真機やその附属品なども惜しげもなく中島に与えたという。

浅草公園五区四十九番地の蓮杖の家は、蓮杖がかねてから懇意にしていた信州生まれの大工筒井という人に建築を依頼したのだが、この筒井という人は蓮杖と付き合いを深めるうちにすっかり蓮杖に敬服してしまって、その後も下岡家、筒井家

の両家は蓮杖の亡くなる大正3年(1914)まで長く交流が続いていた。この筒井家には明治8年(1875)に生まれた花という名の娘がいた。この花は成長するにつれて、これからの女性は何か一つくらいは身に芸なり技術なりを持ちたいと思うようになり、いつしかそれは写真を習ってみたいと思うようになっていた。そこである日のこと、花は父に連れられて蓮杖の家を訪ねて、蓮杖に弟子入りを申し込むこととなった。蓮杖は花がまだ小娘ながら奇なことだとそれを褒めて、自分の弟子というより、今や東京でも評判の中島待乳の弟子にしてやろうと思って、すぐにその足で中島の写真館を訪ねて承諾の返事を貰ってやった。花はその日から中島待乳の家に住み込みとなって、その後も熱心に写真の修業を積み、それから数年後には中島の家を出て、横浜羽衣町弁天社内独立、写真館を開業したが、これが大変に繁盛して、日本に於ける女写真師の元祖として大評判となった。この花はその後も下岡家とは親密な付き合いがあり、女同士ということもあって蓮杖の娘・ひさとも懇意にしていたが、惜しいことに大正12年(1923)9月1日の関東大震災で消息を絶ってしまった。

明治9年(1876)蓮杖は長男の東太郎と写真の営業をしていたが、その内実は写真師というより、写真館で使用する背景製作に力を入れていた。家の付近には次々と新しい写真館ができていたこともあったし、蓮杖の弟子である江崎礼二や勅使河原もすぐ傍で開業していたのである。この浅草の蓮杖の家には横浜時代から親交のあった明治初期の洋画壇の画家たちもよく訪ねてきた。五姓田芳柳、五姓田義松(芳柳の息子)、山本芳翠、横山松三郎(この頃の横山松三郎は写真館の方は弟子に譲って、明治6年には上野で画塾を開いていた)、亀井至一(横山松三郎の弟子)、高橋由一などである。特に五姓田芳柳は蓮杖に先立ち明治6年(1873)には横浜から浅草に移り住み、狭客の新門辰五郎と相談してすぐに金龍山浅草寺境内でジオラマの興行を行っている。そして明治8年(1875)にも引き続きジオラマの興行を行い、歌舞伎役者を主題として、この興行も大成功をおさめた。

こうしたことも蓮杖が横浜から浅草に移転した理由の一つだと思われる。明治11年(1878)には上野不忍池の畔にある竜池院で、松田玄々堂の主催によって油絵展が行われた。この時に蓮杖と共に五姓田芳柳、五姓田義松、山本芳翠、横山松三郎なども作品を出品している。蓮杖は泥絵具で「船の図」を洋画風に仕上げ出品したという。

こうしたこと蓮杖が横浜から浅草に移転した理由の一つだと思われる。明治11年(1878)には上野不忍池の畔にある竜池院で、松田玄々堂の主催によって油絵展が行われた。この時に蓮杖と共に五姓田芳柳、五姓田義松、山本芳翠、横山松三郎なども作品を出品している。蓮杖は泥絵具で「船の図」を洋画風に仕上げ出品したという。

(森重和雄)



五姓田芳柳筆の明治天皇御影図
(日本カメラ博物館所蔵)